

『方丈記』

- 災害が語る無常
  - 平安時代末期から鎌倉時代初期
  - 
    - 1177年 大火（都の3分の1焼失）
    - 1185年大地震（寺院や民家が倒壊）
    - 5つの大災害
  - 人生の儚さ＝無常観
    - 人間の力の及ばない運命の無常さ
    - ⇒ 仏教的な世界観を浮き彫りに
- 小庵に見出す自由
  - 
    - 50歳を過ぎて都を捨てて比叡山へ
    - 4畳半ほどの小さな庵「方丈の庵」
    - 隠遁生活
  - 心の充実を求める
    - 自然と寄り添い、読書や音楽三昧
    - 「一間の庵、みづからこれを愛す」
    - ⇒ 世俗的な欲望や執着からの解放
- 自然に学ぶ生き方
  - 自然
    - 四季や動植物など細やかな表情を描写
    - ⇒ 自然の永続性と人生の短さを対比
  - 
  - 無常観
    - 冒頭の一節「ゆく河の流れは絶えずして」
    - 『方丈記』全体を貫く重要なテーマ
    - 自然と調和して生きる＝人生の真の意味